

# 院外茶話

vol.77 平成23年10月1日

色は言葉で表せない  
蝶々にしか見えない  
人にしか見えない  
それぞれの世界があつて

## 見える世界 見えない世界

「上になったり、下になったり、蝶々っていいな」

坂本九の歌で、歌詞が性を連想させるという理由で発禁、放禁になった。今の感覚だったら時代錯誤と思うけど、確かにモンシロチョウが求愛をする時は、オスとメスが戯れるように飛んでいる。

そのモンシロチョウの幼虫は、アブラナ科の葉を好んで食べるので、キャベツ畑でさなぎが育つ。オスはここにやってきて、孵化したばかりのメスを探すのである。こうしてキャベツ畑は求愛の場になり、冒頭の歌ができた。

この時モンシロチョウのオスは、メスしか見ない。しかも、見るのはメスの翅の裏側で、スカートの中でもあるまいし、翅の裏に何があるか。そこに見えるのはある波長の紫外線で、それはメスの証なのです。



メスの翅は特別な光を放つ。

人が感じる光の波長は限られていて、スミレ色から赤くらいまで。しかし、モンシロチョウにはもっと短い波長が見える。

メスは太陽の光を受けると、翅の裏側がこの紫外線を反射するので、オスはこの色を追いかけて、「上になったり、下になったり」して飛んでいるのです。

蝶々に限らず、目の質が違えば、見える世界も違う。昆虫、鳥、爬虫類、哺乳類。他にもいっぱい。

彼らはそれぞれ違った目で、どんな世界を見ているのか。視力のいいハヤブサは、飛んで行くゴルフボールをテレビ中継のように、はっきりと見るのだろうか。

トンボは複眼で、その視力は初期のデジカメ程度。トンボが見る世界には、モザイクがかかっていることだろう。

本物の世界は一つしかないはずだけれど、生き物はその中から、自分の暮らしに必要なものだけを選んで見る。

人間も同じことだけれど、我々は見える世界が全てでないことを知っている。

夜空を見上げれば、一段と大きく輝くのは月。昔の人が、一番大きな星と思ったのも無理のないことで、それが証拠にかぐや姫だって月から迎えがやってきた。でも、実際は違う。



どう見ても月が一番大きいのです。

どんな生き物の目も、間違いをおかす。我が家にいた犬は、雑貨屋の店先に飾ってあった陶器の犬を見る度に、大声で吠えた。あまり吠えるので、ある日すぐそばまで連れて行って、

本物でないことを教えると、以来見向きもしなくなかった。

こういう間違いは、結構生死を分けるもので、カメレオンやタコの擬態は、敵を欺いて生き延びるための特技である。天敵を欺いて、見破られて、また欺いて、いたちごっこのよう。

間違いとは別に、もともと目には見えない光もたくさんあって、赤外線は暖かさとして肌で感じるし、ひどい日焼けをして、初めて紫外線の強さを知る。

飛んでくる電波は見えないが、これがテレビの画面で映像に変われば、初めて電波の存在を知る。

話はちょっとそれるけれど、見えない電波を送り続けた東京タワーが、その役割をスカイツリーに譲って、今度はただ見られる存在になってしまった。



日によってライトアップの色が変わる。

問題は放射能で、福島を起点にどこまで広がっていくのだろう。

原発事故があって、避難命令が出たけれど、あまりに急な出来事で、どの程度危険なものかわからない。連日、テレビに出てきて安全、安全と叫び続けた学者もいた。

住民の中には事故の直後に、逸早く子供を連れて避難をした人もいたし、ピンとこなかった人は、そのまま居座った。

今のところ、放射能の直接的な健康被害が、大騒ぎになってはいない。人によっては蚊に刺された程度かもしれないし、子供や妊婦の場合は末代までの禍根を残すかもしれないが、それがわかるのは何年後のことか。

自宅を死に場所と決めて、お迎えを待っていた年寄りが、避難をしろと言われて、最後まで

で嫌がっていた。

「摂氏 100 度の灼熱地獄。」

「地下鉄の車内は 100 デシベルの騒音。」

そう言われれば、想像はつく。しかし、日ごと報道をされる何ミリシーベルトと言う放射能の数値は、どうも馴染めない。

放射能は見えないから、これを人が察知するためには、テレビのような受信機が必要になる。それがガイガーカウンター。高濃度の被爆地域にしながら、情報を教えてもらえなかった人も、これがあつたら避難をしていたかも知れない。



ガイガーカウンターとはこんな格好です。

今、携帯電話の普及率は約 90%。みんなが自分のいる場所の天候を呟いて、誰かがこれを地図の上に表せば、瞬時に日本中の正確な天気がわかる。

同じような方法で人口の 1% でもいいから、ガイガーカウンターをもった人が、日本中から自分のいる場所の放射能を、呟いてみたらどうだろう。刻々と変わる放射能の汚染地図ができないか。

半信半疑で見えていた、これまでの放射能の分布だって、本当のところが見えてくる。見たいものは何とかして見てきたのが、人類の歴史なのだから。

20 世紀は視覚の世紀で、どういう根拠かわからないけれど、生活情報の 8 割が目を通して入るといふ。今は、見えなかった細菌が見えるようになって、エベレストの頂上も、胃袋の中も見ることができる。

ニュートリノも見つかったことだし、これからも、想像もしなかったものが、どんどん出てくるだろう。

こうして新しいものばかりに目が向くけれど、最後にモンシロチョウを見たのは、いつのことだったろうか。